

マリノウスキー論(完)

棚 瀬 襄 爾

七

マリノウスキーは統合的全體としての文化の理論に於ても、文化とは社會的遺産 social heritage であるとする規定に於ても、文化の超個人的 superindividual な性質にいち早く着眼してゐると思はれるが、然し彼は個人と社會とを對立せしめず、有機的なるものと文化とを對比して文化の特質を理解せんとしてゐる。

先に形質人類學と文化人類學との對象領域を述べた際に若干指摘したやうに、人間の得てゐるものに二種類ある。一は母胎から生れた人間、有機體としての人間が本具的に得てゐるものであり、二は社會から學んで得てゐるものである。後者が文化の領域であり、文化が超有機的 superorganic であると言はれるのはこの意味である。超有機的であると言ふのは非有機的 non-organic 即ち有機的なるものゝ影響を受けな^いとか、作因としての有機體から自由であることを意味しない。それは有機的以上のもの organic-plus を意味するのであるが、文化のかやうな超有機性に着眼した學者は極めて多い。とりわけクルーバーの鮮かな指摘には聞くべきものが多い。けれどもこの超有機的なるものが有機的なるものに對して如何なる關係を有してゐるかに就ては我々はマリノウスキーに於て學ばねばならぬのである。マリノウスキーの欲求論が主として有機的なるものから超有機的なるものへの關係を描いてゐるに對して、彼はこゝに超有機的なるものから有機的なるものへの關係を描かんとするのである。

マリノウスキーは文化は本能を抑壓 *repression* するものであるとする。彼はこのことを一方に於て精神分析と關係せしめると共に、他方では動物の家族乃至交合と人間のそれとを比較することによつて明らかにしようとしてゐる。精神分析 *Psychoanalyse* は周知の如くフロイド *S. Freud* が元來は精神病の病源を診斷するに用ひた方法で、文化現象をも之によつて解釋せんとしてゐる。精神分析の説くところによれば精神に特異の變化を起す原因は過去の精神状態の蓄積された無意識である。この無意識の表徴が夢であり、無意識の素質が複合 *Komplex* と呼ばれるものである。フロイドによれば抑壓された幼少時代の性欲が中心的複合を形成するのであつて、男性のは *Oedipus Komplex* 女性のは *Electra-Komplex* と命名されてゐる。フロイドもかゝる無意識と現實の意識の衝突を説いてゐるがマリノウスキーはこの複合を明確に文化の産物であると指摘する。マリノウスキーによればエディプス・コンプレクス又は他のコンプレクスの本質は文化の漸次的形成の過程の本質的な副産物である。人間の両親と子供との間には、本能に支配される動物の家族には存在しない、近親姦的誘惑が發生するに相違ない。然も姦淫と組織的家族生活は兩立し得ざるが故に人類に於ては抑壓されねばならない。文化は強制的な權威なくしては遂行されぬ教育を意味するが、この權威は人間の家族に於ては父によつて興へられるから、父と子との間の態度は複合と言ふ抑壓された憎悪⁽²⁾の他の要素を作ると言ふのである。

一方マリノウスキーは文化が本能を越えたものであることを示す爲に人間の性欲、妊娠及び出産と家族生活、結婚等の關係に就て語つてゐる。マリノウスキーによると生物學的な見地から見ると人種の連続は極めて簡單な方法で満足されうる。交合によつて一組の男女に對して二、三人の子供を生めば足る。そうすれば二人が死んでも人種の連続は可能である。若し生物學的なもののみが人間の出産を支配するならば、人間は生物學的法則によつて結婚するであらう。彼等は妊娠、出産と言ふ自然の過程を辿るであらう。人間は生物學的に規定せられた家族生活を營むに違ひな⁽³⁾。そして生物學的單位としての人間の家族は全人類を通じて正しく同一の構造を示すに相違ないのである。若しさ

うならそれは文化科學の領域以外に留ることになるのであるし、實際多くの社會學者は家族を社會學の領域以外のものと見てゐる。然し事實はさうではなくして、求愛、戀愛、配偶の選擇の何れもが、全ての人間社會に於て、夫々の社會に行はれてゐる文化的慣習によつて傳統的に規定せられてゐるのである。誰とでも結婚してよいと言ふのではなく、ある者とは結婚してはならぬが、他の者とは結婚することが望ましいと言ふやうな制度は極めて多い。貞節や許容 license にも規則があり、自然的衝動と混合して魅力の理想を生む嚴密な文化的要素もある。生物學的に決定された齊一性ではなくして、交合を規定する夥しい求愛や性慣習が存在するのである。人間の文化の中に存在する結婚は決して單純な性的結合でもなく、二人の共住でもなくして、法的契約であり、又夫妻の共同生活の様態を決定し夫妻の夫々の親族の協力を決定する經濟的條件でもある。それは又公共的儀式を伴つて行はれる社會的關心事である。結婚の解消も亦一定の傳統的法則に従はねばならない。受胎、妊娠、出産、親子關係等も亦決して單なる生物學的なものではなくして、傳承に取かこまれ、道徳的價值、法則、禁忌、呪術的、宗教的儀禮に取かこまれてゐる。妊娠から出産に至る間の親の義務も傳統的に決定せられてゐるのであり、時にこの義務は更に遠い親族に及ぶこともあるのである。父系、母系の區別や氏族の如き分類組織も自然的親縁の文化的改變である。尙マリノウスキーに取つてはこの家族の考察は一切の人間の社會、文化の基礎として重要視されるが、今は割愛する。⁴⁾

食欲に關しても消費制度、生産制度、分配制度があつて衝動は社會的、文化的命令の様式に於て活動する。それは生理的欲求の社會的傳統的に承認せられた法則による再解釋である。つまり人間は戀愛をするにも土を耕すにも、漁撈を行ふにも直接に本能によつて動かされてゐるのではなくして、部族の傳統に従ふのである。⁵⁾

マリノウスキーは以上の如くに文化の本能抑壓性に就て語つてゐる。マリノウスキーは先にも述べたやうに基本欲求を中心とする生物學的諸欲求を文化の基礎に重要視し、文化の解釋に之を用ひ、時にこれ等の欲求が文化を作るが如き口物を洩らしはするけれども、文化の作成については説かず、文化ははじめから存在するが如くに論じてゐるが、

こゝでも文化は既に存在するものとして其の本能抑壓性を説いてゐるのである。文化の始源に關する知識を持たぬと言ふ彼の言葉から見ても彼が現在の人間生活と文化とを捉へ、之を分析して有機的なるものと超有機的なるものに區別し、この二元をそのまゝ認めながら、結局に於て兩者の調和を考へてゐたものと如くである。それは彼が、文化の本能抑壓性を説きながら、同時に文化は生物學的欲求の不満足をこゝ僅かしか残さずに満足せしめるものであると言ふ言葉からも推知することができる。

- (1) A. L. Kroeber: *The Superorganic*, A. A. 1917, pp. 161-213. id: *Anthropology*, new ed. 253 f.
- (2) Malinowski: *Sex & Repression in Savage Society*, pp. 182 f., pp. 274-8.
- (3) Malinowski: *Sex & Repression in Savage Society*, esp. *Instinct & Culture*, II, III, IV, V. id: *Culture*, E. S. S. IV, p. 628.
- (4) Malinowski: *Sex & Repression in Savage Society*, pp. 187-192.
- (5) Malinowski: *Culture*, E. S. S. IV, pp. 628 f.
- (6) Malinowski: *Sex & Repression in Savage Society*, p. 181.
- (7) Malinowski: *Culture*, E. S. S. IV, p. 629.

八

マリノウスキーに就て論ずるにはマリノウスキーの現地研究法に就て僅かでも觸れなければならぬ。

人類學的研究に於て現地研究 *field work* が重要視せられてゐることは今日何人にも普く知られてゐるが、學史的に如何なる變遷を辿り、學問的に如何なる意義を有するかに就ては専門家にも案外充分の反省がなされてゐないやうに思はれる。現地調査ははじめまづ旅行者、官吏、宣教師等によつてなされた。これ等の中には、特に初期に於ては極めて表面的な觀察もあり、又未開人を動物の如きものと考へたり、逆に天使の如きものと考へるやうな偏見に満ち

れてゐるものもあつたが、次第に正確な觀察に進むやうになり、西洋文明に害はれぬ前の未開民族について、長年の滞在による民族への親しみと土語の理解とによつて、中には現在から見ても追隨を許さぬ程に描いてゐる報告もなされるやうになつた。例へばキャラウェイのアズール⁽¹⁾の宗教制度、コドリントンのメラネジャ人、スペンサー及びジレンンの中部北部中央オーストラリア土人、ホーキットの東南オーストラリア、デューノの南アフリカ、スミスとデイルの北部ローデシア等の調査報告が之である。⁽²⁾ラディン P. Radin はキャラウェイの「アズールの宗教組織」と練達の民族學者ボアスの「クアキウトル・インディアン⁽³⁾の宗教」とを比較して前者に重配を擧げてゐる程である。⁽³⁾

現地調査は勿論理論の影響を受けるけれどもこの問題は暫くおき、一方民族學者人類學者と言はれてゐる人々は、特に十九世に於ては、モルガン L. H. Morgan のイロコイ族研究を除き⁽⁴⁾何れも所謂 *armchair anthropologist* であつて、自らは現地研究を行はず、與へられた報告書を博覽し、報告書を、丁度歴史家が記録に對するが如くに、資料として扱ひ、所謂 *extensive study* 乃至は *cross-cultural documentation* を行つたのである。⁽⁵⁾ *extensive study* に意味がないと考へてゐる學者もあるが、私自身はこの様な研究方法にも意味を認める。特に文化の形態的、歴史的研究に於てはこの方法は不可欠である。けれども資料と學者との關係と言ふ點となると、兩者の間には間隔があつて直接的でない。

十九世紀末年に至つて自然科学的教養を身につけた人々が斯學に従事するに至つて兩者の關係は著しく變化して來た。民族は彼等に取つては單なる資料ではなくして、直かに取くまれる對象となつたのである。この種の研究に先鞭をつけたものは獨逸に生れ物理學と地理學を學び、後アメリカで大成したアメリカ人類學の父ボアスの一八八三—四年のエスキモー研究、其の後のバフィンランド及び英領コロンビアの現地研究である。⁽⁶⁾ 英國では専門家による現地研究の行はれたのはハッドン A. C. Haddon を團長とする一八九八—九のトレス海峡諸島に對するケンブリッジ人類

學的探險隊の調査を嚆矢とすると言つてもよい。⁽¹⁶⁾

けれども眞に内面的集約的に土人の生活、社會及び文化の連關を理解した現地研究は機能主義者を俟つてはじめて可能であつたのである。彼等にあつては狭小な地域の intensive study は彼等の文化觀が要求するし、又其の文化觀は現地研究によつて磨かれたのである。彼等は狭小な地域の研究によつて文化に於ける一般的なものを見たのであつて、彼等の現地研究と理論とは一枚の紙の表裏の如きものであつた。言ふまでもなくハットン、リヴァーズの門下に育つたラドクリフ・ブラウンの一九〇六—八に亘るアングマン諸島人の研究とホブハウス、ウェスターマーク、セリグマンの門下に育つたマリノウスキーが一九一四—一八年に亘つて行つたトロブリアンド人の調査が之である。⁽¹⁸⁾この兩者の最初の詳細な報告の出たのは一九二二年で年を同じくしてゐる。然しラドクリフ・ブラウンの調査はマリノウスキーに先立つこと凡そ十年で、其の意味に於ては高く評價されるが、シュミットなどが痛烈に批判してゐるやうに、⁽¹⁹⁾ラドクリフ・ブラウンの調査期間は比較的短く、何よりも土語に精通しなかつた憾みがある。然るにマリノウスキーは専門學者としては空前の長期に亘つて同一民族の調査を続け、然も土語によつて、土人の生活の中にとけ込んで調査をとげたのである。現今社會人類學者の現地調査に重んぜられる條件として、(一)相當長期間をかけること(オクスフォードでは少くも二年とする)、(二)土人と親密となり、土人の社會生活を外からでなくて内から觀察すること、(三)官吏乃至宣教師としての地位でなく彼等と同じ社會的地位に立つて觀察すること、(四)自己と同じ人種や文化の友人と絶縁して唯一人士人の間に入つて調査し、別離を告げるにあつて兩者に別離の悲哀が湧かなければ成功と言へないこと、(五)土語を習得し、土語のみによつて直接に交通すること、(六)部分では全體の文脈の中にあるから社會生活の全體を研究しなければならぬこと、等が擧げられるが、マリノウスキーのトロブリアンド研究に於てはこの凡ての條件が充されてゐるのであつて、彼の調査が如何に調査史上における金字塔であつたかが判るのである。其の記述の精細なることと文化的事象の相關々係の究明とは、必然的に敘述の繰返しを結果するけれども、其の稀なる文筆と相俟つて、讀者を

して宛もトロブリアンド島に住む思ひを起させるのである。マリノウスキーと並ぶラドクリフブラウンも亦優れた
 フィールド・ワーカーではある。然しエヴァンズ・ブリットチャード等が指摘してゐるやうに、彼は一般人類學に關す
 るより廣き知識を有し、又より思索家であるに對し、マリノウスキーはより完全なフィールド・ワーカーで、其の理
 論はフィールド・ワークを離れなかつた。然も其の現地に於ける珍奇なものゝみに幻惑されず、あくまで之を一般的
 なるものとして理解してゐるのである。

けれどもこゝに一つの問題が生ずる。局地的なるものを果して完全に一般化しうるかと言ふ問題である。なる程極
 地の文化も普遍的なるものを持つに違ひない。例へば機能乃至機能的連關は言はば線を以て表現し得るものであるか
 ら一般化し得るに相違ない。然し特殊な文化の形態が機能と混同されることはありはしまいか。文化事象に於ては機
 能と形態とを切離して理解し得ぬことが多いから、益、この懸念が強く起るのである。私は曾てマリノウスキーの呪
 術論に就てこの點に觸れた。⁽¹⁰⁾マリノウスキーの呪術論は呪術論中の壓巻であるが、マリノウスキーが呪術の力をメラ
 ネシアの知識に基いて呪文の力であるとした點を私はマリノウスキーに於ける形態と機能との混同ではないかと論じ
 たのである。私はこの疑問をエヴァンズ・ブリットチャードがロンドン大學へ *Ph. D.* 論文として提出した「呪術の形態
 と機能」と題する論文⁽¹¹⁾によつて解決せんとした。マリノウスキーは一箇處の現地調査の資料をあまりに高く見て一般
 化した結果、機能と形態を混同し、普遍化し得ざるものを普遍化した。エヴァンズ・ブリットチャードはマリノウスキ
 ーがトロブリアンドで行つた詳細にして集約的な現地研究と自己の行つたアフリカのアザンデ族の之又詳細にして集
 約的な現地研究の結果を比較することによつて文化の機能主義的研究に對して一步の前進を與へたのである。彼が最
 近の著書に於て二つの社會の現地調査を人類學者に望んでゐるのも宜なるかなである。⁽¹²⁾マリノウスキーも勿論トロブ
 リアンドのみを調査したのではなかつたが、他の研究にはそれ程の熱が入つてゐなかつたものゝ如く、彼の論文には
 トロブリアンドを基礎としての思辨に屬するものが多い。集約的研究の限界も亦我々は彼に見なければならぬ。

- (一) H. Callaway: The Religious System of the Anazulu, 1870. R. H. Codrington: The Melanesians, 1891. B. Spencer & Gillen: The Native Tribes of Central Australia, 1899. id.: Northern Tribes of Central Australia, 1904. id.: The Arunta, 1927. A. C. Howitt: The Native Tribes of S. E. Australia, 1905. H. A. Junod: The Life of a South African Tribe, 1912-3 (French ed. 1898). E. W. Smith & A. M. Dale: The Ila-Speaking Peoples of Northern Rhodesia, 1920, etc.
- (二) F. Boas: The Religion of the Kwakwilt Indians, Columbia Univ. Publications in Anthropology, X, 1930.
- (三) P. Radin: Method & Theory of Ethnology, 1933.
- (四) L. H. Morgan: The League of the Iroquois, 1851.
- (五) F. Boas: op. cit. id.: Indiamische Sagen von der Nord Pazifischen Küste Amerikas, 1895. id.: Ethnology of the Kwakwilt, 35th Report, Bureau of American Ethnology, 1913-14. id.: The Thompson Indians of British Columbia, Publications of Jesup N. Pacific Exp. I, 376-390. id.: Social Organization and Secret Societies of the Kwakwilt Indians, Reports, U. S. Nation Museum, 1895. id.: The Central Eskimo, Annual Report, VI, Bureau of A. Ethnology, 1888. id.: The Eskimo of Baffinland and Hudson Bay, Bulletin, No. 15, Amer. Museum of Natural History, 1907, etc.
- (六) Report of the Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits.
- (七) A. R. Raderiffe-Brown: The Andaman Islanders, a Study in Social Anthropology, 1922.
- (八) esp. Argonauts of The Western Pacific, 1922. Coral Gardens and their Magic, 2 vols. 1935.
- (九) P. W. Schmidt: Der Ursprung der Götteridee, III, 1931, S. 52-60.
- (十) E. E. Evans-Pritchard: Social Anthropology, 1950, pp. 77-80.
- (十一) A. R. Radcliffe-Brown: Structure & Function in Primitive Society, 1952, p. 181.
- (十二) 拙著「民族宗教の研究」昭十六年三月一—一〇頁。
- (十三) Malinowski: Magic, Science & Religion (in Needham's), 1925.
- (十四) E. E. Evans-Pritchard: The Morphology and Function of Magic, a Comparative Study of Trobriand & Zande Ritual & Spell, A. A. XXXI, 1929, pp. 619-641.

*

*

*

私はもはや本論を終らなければならない。本論はマリノウスキーを祖述したものではなく、其の學史的意義や根本的立場や問題点を指摘するに終つて、批判も十分でなく、又個々の文化事象の機能に關しても取扱ふことができなかった。本論を終るに當つて述べておき度い事はマリノウスキーが文化研究に一紀元を劃したことである。彼は進化主義を批判し、歴史學派を難じて機能主義を打立てんとした。それは彼の現地研究における劃期的功績と共に正に特筆さるべきことである。彼は一つの學問の傾向の開拓者にふさわしく、華々しく當時までの學問の諸傾向を打破せんとした。けれども彼は方法的問題に於ても學問の對象領域に於ても未整備であつて眞に一科學の樹立者と稱し得るか否かは疑問である。又彼は文化のある一面を捉へて多くの卓見を示したが、それも現存的な機能の解明に終つた。此の立場に於ても當然條件による文化の變化の問題は出て來る筈で、彼は晩年文化變化の研究に従事してゐたが、それを理論化する生命を恵まれなかつた。彼は文化の形態又は構造に著しく無關心であつたが、この形態や構造の面に今少し注意を拂つたならば、世界を舞臺としての文化の問題に取組むに至つたであらう。環境の意義を重要視しながら、之を類型的に把握して人間との關係を考へることもしなかつた。又彼は文化に歴史乃至發達のあることを知りながら之に手を染めなかつた。彼の立場からでも形態を考慮に入れ、條件による變化を考へ、然も一定の尺度を持つた文化の發達の問題に手を染め得たかと思はれる。今日我々は歴史主義の明らかにした結果と、各種の尺度を持つた發達した機能主義的研究の結果とが著しく接近してゐることを知りうるのであるが、學問の開拓と現地研究とに多忙であつたマリノウスキーには終にそれは果されなかつた。要するにマリノウスキーは體系を持つた文化科學の樹立者とは言ひ難いが、新しい分析的な文化研究の開拓者として重要な意義を持つてゐると思はれる。(完)

(1) cf. E. D. Chapple & C. S. Coon: *Principles of Anthropology*, 1942.

(筆者 龍谷大學文學部〔宗教社會學〕教授)

On Bronislow Malinowski

By Jôji Tanase

As the theory of B. Malinowski (1884-1942) has been discussed widely in the academic circle of Japan, it is fairly well understood. Its method of field work also has been introduced and is put into practice. Even today, however, after ten years have passed since his death, the foundation of his theories is not yet analysed in Japan to the full. Therefore this paper tries to examine critically the significance of his theories in the history of science and the central point of the various problems in his theory of culture.

First historical evolutionism and the Kulturkreis theory are analysed, and the author sees as highly important the method of the latter. But in the latter the relationship between cultural items in a cultural realm is only of co-existence and not seen in their connection in a chain. The author, in this point, recognises the excellency of observation of Malinowski, who has developed cultural anthropology as an analytical science, and the significance of his theory in the history of science. Then the author treats of the scope of his cultural or social anthropology and points out that he was a reformer in social science, but not a radical one.

The author, then, tries to analyze and criticize fully the theories of the integrated whole of culture, the correlation and concatenation in the whole, and the scientific treatment of the concept of integration. In connection with these problems, the author, treating of the concept of function and the problem of the biological basis of custom, in comparison with the theory of R. Radcliffe-Brown, recognises that Malinowski's theory of need is excellent for fundamental understanding of culture. However the author points out that he has no interest in the form of culture, the history and the geography of the world.

In the last part, the author discusses the theory of Malinowski, in which culture means education, introducing its viewpoint for psychoanalysis. In a word, the paper analyses the fundamental standpoint of Malinowski's theory, without giving much attention to his topical arguments.